

風青し

風は空気の流れに過ぎませんし、色がついているわけでも匂いがあるわけでもありませんが、季節から季節への橋渡しという大きな役目を担っています。

豊かな自然に囲まれ、生かされてきた日本人は、昔から、風という響きにも様々なものを感じ取ってきました。

春風という響きは厳しい冬の終わりを告げる浮き浮きとした気分を感じさせますし、秋風という響きは、ひと風ごとに木々の葉を赤や黄に染めながら、冬への誘いを感じさせます。

花粉症に悩まされている人は、春風といえば花粉症を連想するかも知れませんが、中国から大量に運ばれてくる黄砂もやっかいな代物ですが、日本人は、このやっかいな黄砂も花粉症も季語にしています。

北海道は、ようやく春から初夏の香りを感じる頃となりました。春になると、重苦しい冬の空から解放され、空気までもきらきらと輝いているように感じられますが、そこから「風光る」という言葉が生まれたのでしょうか。北海道の場合は、春になると、風の輝きと大地のぬくもりを同時に体感することができます。

その風も、初夏の頃ともなれば若葉の上を吹き渡り季節の変わり目を知らせてくれます。その時、日本人は風の中に若葉や桜の花をはじめ様々な花の香りを感じ取り「風薫る」と表現します。

また、「風薫る」という言葉にそぐわないかも知れませんが、私は、土の香りさえ春風に乗って運ばれてくると、それはまた香しいものと感じます。子どもの頃は、畑の方から土の匂いと共に吹いてくる暖かな風の中に、大地が呼吸している、大地は生きてると叫びたいような気持ちになったことを思い出します。

「風薫る」という言葉には、重苦しい冬からの開放感と命の温もりがあるといえるでしょう。

更に日本人は、新緑を吹き抜ける初夏の爽やかな風に、木々の緑の鮮やかな色合いを感じ取って「風青し」と表現します。この言葉には、単に緑が濃いということだけではありません。目に突き刺さってくる、幾層にも塗り固めたような鋭い緑が風に乗って我が身を吹き抜けていく、その一瞬の輝きがあります。

風の中に、香りだけでなく光や色さえ感じ取ることができ、しかも、それを表現する言葉を持っている私たちは、本当に幸せだと思います。(塾頭 吉田 洋一)